

北田原城跡の発掘調査成果

江浦 洋（公益財団法人元興寺文化財研究所）

はじめに

北田原城跡は生駒市北西部の北田原町の標高約 196 m の丘陵上に所在しています。

近接して伊賀街道や清滝街道、磐船街道が走り、河内や山城の両国境からも近く、まさに交通の要衝に立地しています（図 1）。

周辺には、南西 1.7 km に田原城跡（四條畷市）、北東 3.1 km に高山城跡（生駒市）、西 4.7 km に飯盛城跡（四條畷市・大東市）があります。天野川を挟んで相対する最も近い田原城は現況の地形をみる限りにおいては、お互いが見通せていた可能性が高いものと考えられます（図 2）。

北田原城跡は城郭遺構の残りがよく、城郭研究者には一目置かれる存在でしたが、発掘調査は行われず、帰属年代などの実態がよくわかつていませんでした。

今回、鉄塔の建替えに伴う発掘調査で石積を検出するなど重要な成果をあげることとなりました。今回の調査を契機に北田原城跡は歴史の表舞台に躍り出ることとなりました。

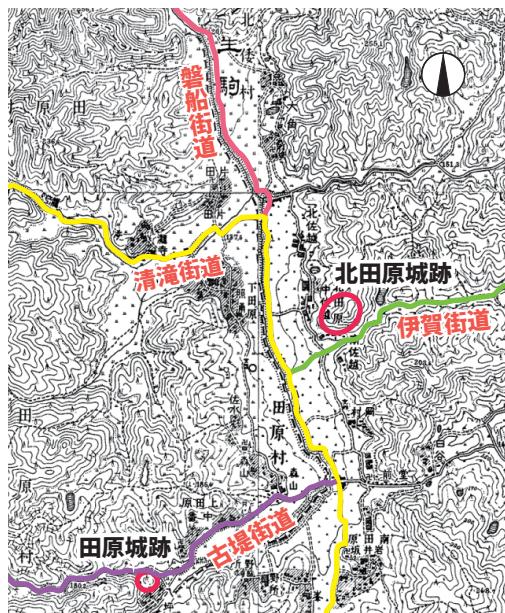


図 1 北田原城跡と主要な街道
(大日本帝国陸地測量部 明治 41 年測量
1/20000 「高山」・「西大寺」・「星田」・「生駒
山」に加筆)



図 2 北田原城跡と田原城跡の位置と視界
(カシミール 3 D に加筆)

1. 調査の概要

北田原城跡に関してはすでに多くの城郭研究者によって縄張り図が作成されて公開されていますが、曲輪の名称に関しては必ずしも一様ではありません。したがって、今回の調査では現況地形の測量と発掘調査によって明らかとなった様相を踏まえて、今回の調査エリアの曲輪に名称をあたえました（図4・5）。

曲輪I 標高 196.0 m の最高所で最も大きな曲輪。曲輪の規模は東西約 23 m、南北約 21 m で南東側にやや傾斜をもった舌状の突出部分があります。北側の曲輪群の中では最高所に位置し、規模も大きいことから主郭であると考えられるものです。

曲輪II 曲輪I の南東側に位置する東西約 11 m、南北約 13 m の曲輪。標高は 194.0 m で

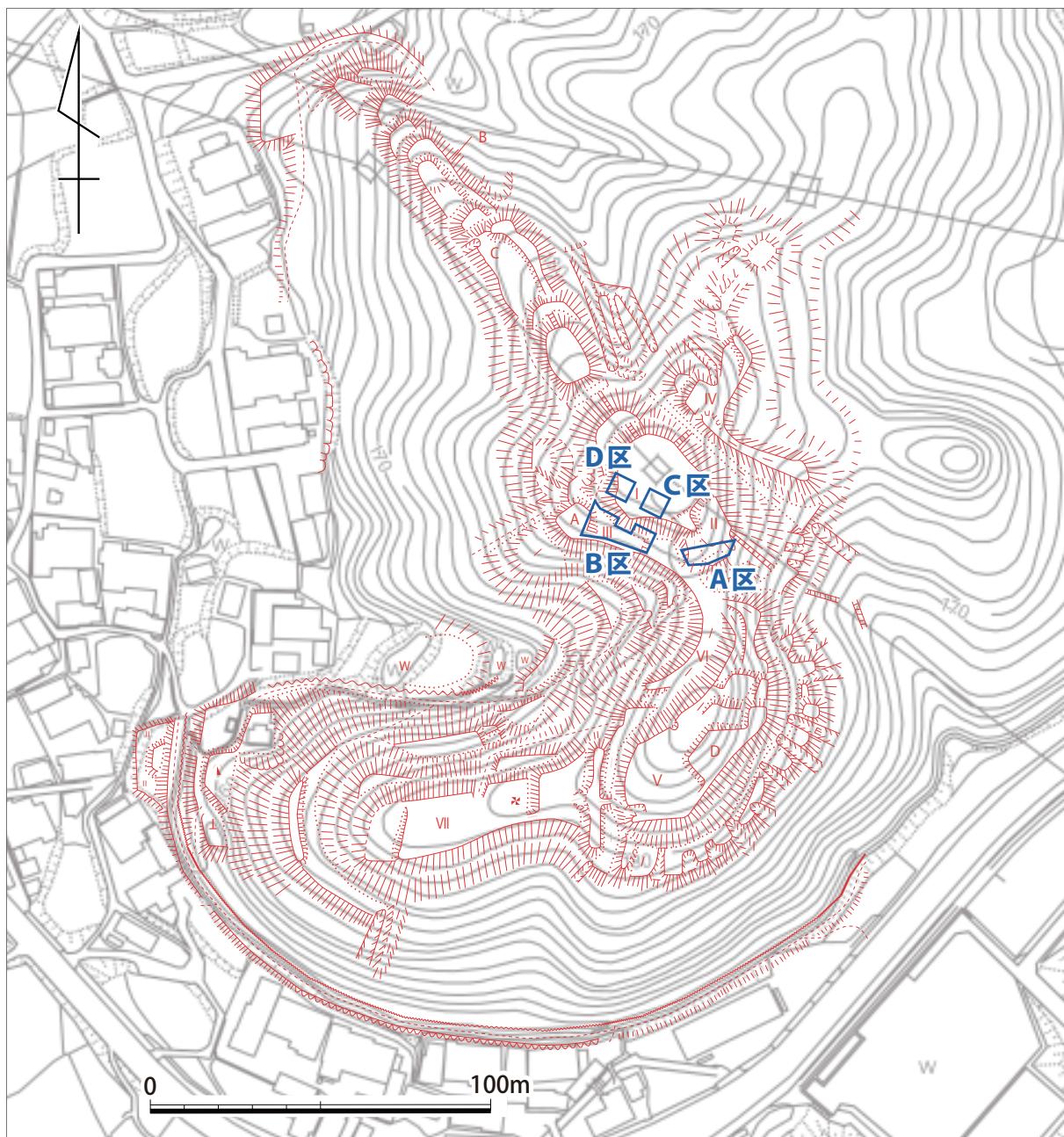


図3 北田原城跡の縄張り図（吉澤雅嘉 2017）と調査区

〔縄張り図は吉澤雅嘉氏作成図（「北田原城『【図解】近畿の城郭IV』2017 戒光祥出版）をトレースして生駒市地理情報白地図に投影〕

曲輪 I との比高差は約 2 m です。

曲輪 III 曲輪 I の南東で検出した曲輪 III。帯曲輪で、標高は 189.5 m、曲輪 I との比高差は約 6.5 m を測ります。

曲輪 IV・V 曲輪 II の南側で検出した小規模な曲輪を「曲輪 IV」としました。標高は 191.0 m です。そのほか、曲輪 I の北西の平坦面を「曲輪 V」としました。現況での標高は曲輪 II と同様と 194.0 m です。

櫓台 A 曲輪 III 西側の独立した方形の高まりを櫓台 A としました。上部の平坦面は台形状を呈し、その規模は約 8 × 7 m を測ります。曲輪 I との間は堀切となり、底部は幅 1.1 m で平坦であり、通路としての機能を有していたものと考えられます。

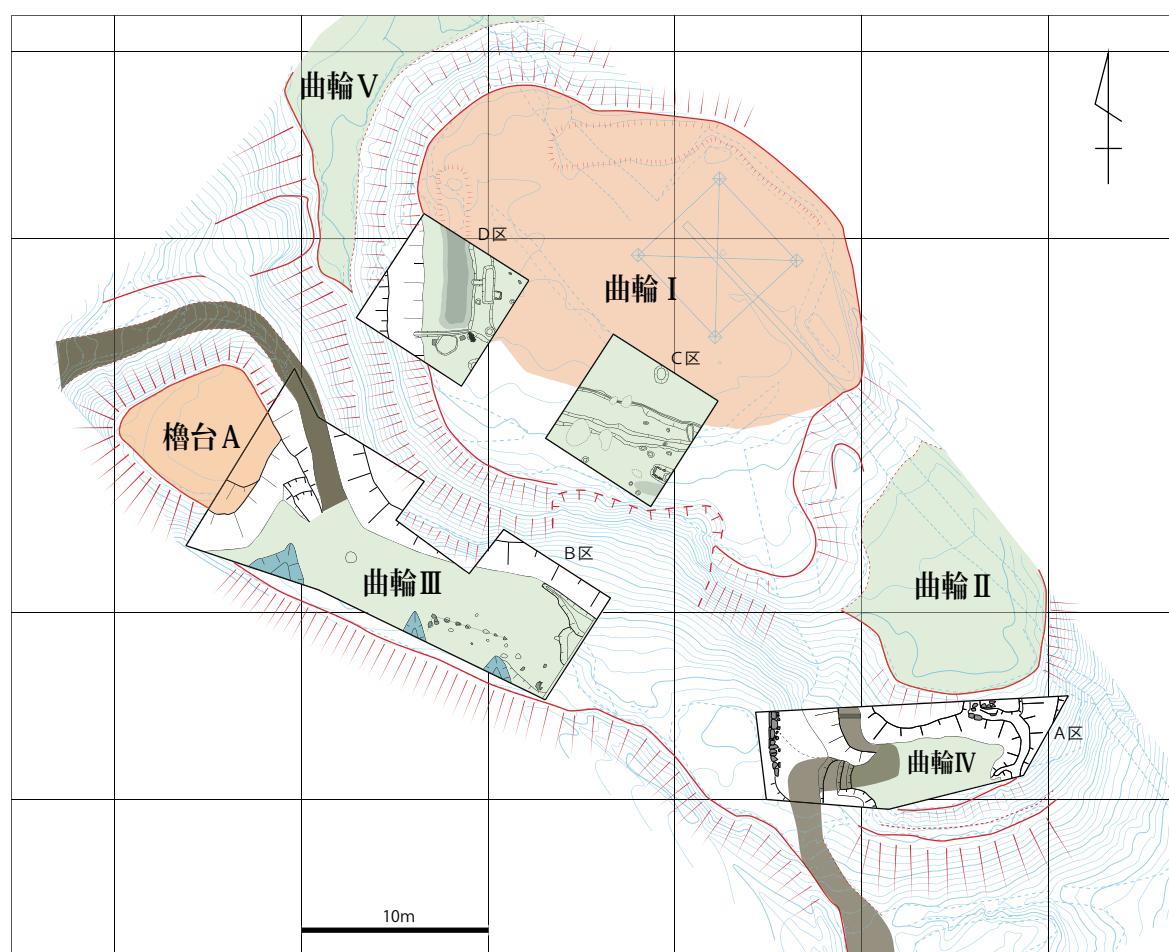


図 4 今回の調査地と曲輪と道

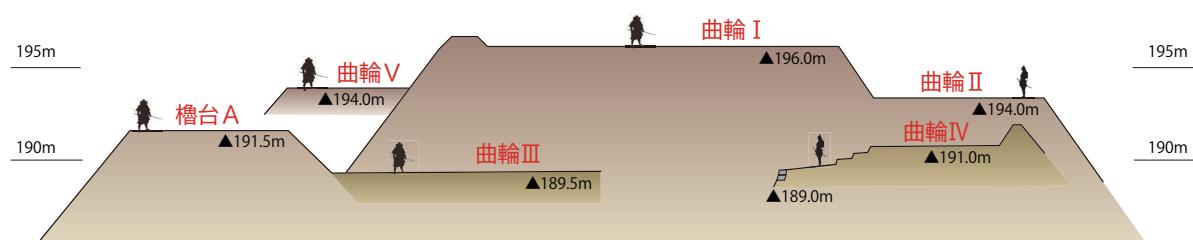


図 5 各曲輪の断面模式図

(曲輪 II と曲輪 V は発掘調査を行っておらず、現況での高さを示しています。実際の高さはもう少し低くなる可能性があります。)

A
X

A区では石積（石垣）、階段状遺構、切岸、平坦面などを検出しています。

A 石積 050 は曲輪 I とした主郭と南側に展開する曲輪群につながる主要な通路と想定される場所に造られています。地山は南側に向かって高くなっています。南で段数が減っていますが、これは造営当初の景観を保っているものと考えられます。



この場所は築城前には谷が入り込んでいた場所と考えられ、盛土と石積による護岸で曲輪と通路が整備されたことがわかります。



図6 石積 050 オルソ画像

オルソ画像は写真をゆがみのない画像に変換（正射投影）したものです。



写真2 階段状遺構055と石積045
(南から)

A区北東で検出した階段状の遺構。石積045は4個の石を積んで法面を保護しており、ステップとなる平坦面を確保するためのものと考えられます。



写真1 石積050（北西から）

地山は南から北に向かって緩やかに傾斜し、南側では岩盤を削り出して段差を造り出しています。加工石材を転用しており、方形の整正な石材は石塔の基壇石の転用であると考えられます。板状の加工石材も用いられており、そのうちの1点は石仏であることを確認しています。



写真3 石積050に転用された石仏
(西から)

石積050に転用された石仏は高さ約57cm、幅約37cmを測ります。仏像は頭部に地髪と肉髻が確認でき、右手を上、左手を下にしていることから如来形立像であることが確認できます。

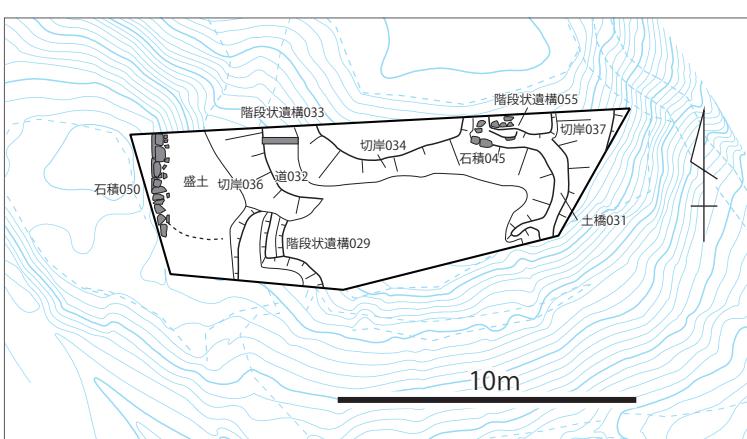


図7 A区平面略図



写真4 階段状遺構 033（南東から）

地山を削り込んで水平に転用石を設置し、背面は盛土で平坦面を造成しています。曲輪IVから続く道に直交することから、階段状の施設であると考えられます。



写真5 台付の皿
(A区出土)

春日大社（奈良市）で中世以降、祭祀に用いられている「ごんばい」と呼ばれる土器に似ています、飯盛城跡からも同じ形の土器が出土しています。皿の部分には二つの孔があけられています。



写真6 B区全景 (南東から)

B区では礎石列、堅堀、ピット、土坑、切岸、堀切、斜路、平坦面などを検出しています。

B
X

北側は地山を急峻に成形し（切岸72）、その下方は平坦面となって帯曲輪（曲輪III）が造成されています。調査区南東では礎石列070を検出しています。東西に直列する礎石列はいずれも北側に面を揃えており、上部構造は不明ながらも、北側に面をもつ施設であったものと考えられます。また、今回の調査で注目される遺構は調査区南端で検出された敵状空堀群です。

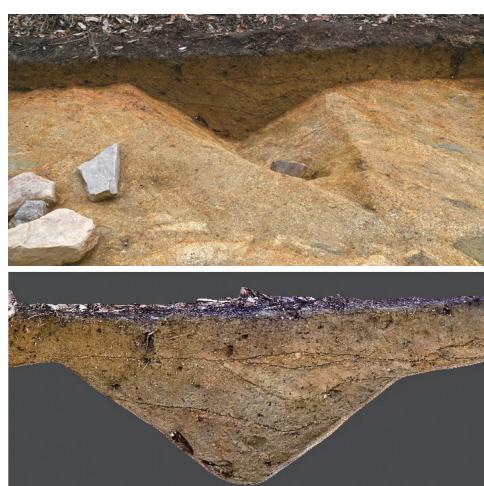


写真7 堅堀 041 (北東から)

断面形状は「薬研堀」と呼ばれる整正な逆三角形をしています。今回の調査では同じような堅堀が並んで見つかっています。



写真8 础石列 070 (北西から)

礎石はいずれも北側に面をもち、地山を掘り込んで上面の高さを調整しています。個々に柱を立てるには間隔が狭く、土台となる材木を据えていた可能性があります。



写真9 切岸 072 (南東から)

曲輪I南側では土の地山を削り出して「切岸」と呼ばれる斜面を作り出しています。切岸法面の傾斜の最も急な部分は63°を測ります。

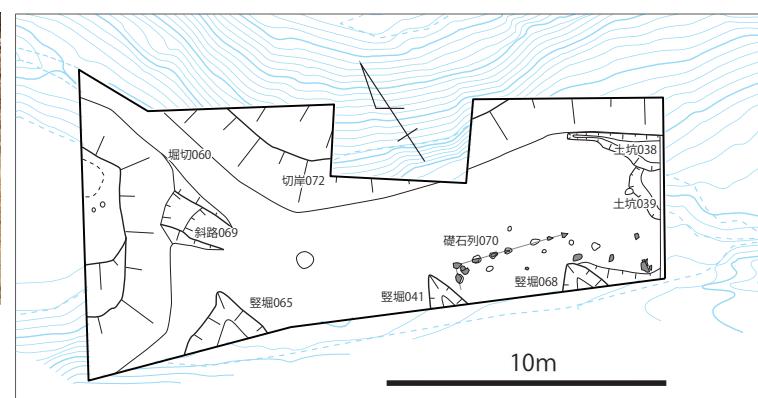


図8 B区平面略図



C区では溝・土坑・ピット・石組遺構などを検出しています。

石組遺構010はコの字状に石が配置され、下層に炭層が厚く堆積、石材は熱を受けて赤く変色しています。

溝のうち、SD003としたものは、C区の南側約5mで生じた「地すべり」の「後背亀裂（地面のひび割れ）」です。下層確認トレンチでは、この「後背亀裂」と盛土造成の際に行なわれた地山の法面を加工した上端ラインが対応することを確認、この地すべりは「曲輪I」の造成時に行なわれた盛土に起因していることが明らかとなりました。

北田原城築城段階において、この部分には南から谷が入り込んでおり、当該箇所は盛土による造成が必要であったと考えられます。確認した部分では、厚さは約1.8mにも及ぶ盛土による整地作業が行われていて、築城時に飯盛城と同様に大規模な土木工事による曲輪の造成が行われていたことが明らかとなりました。

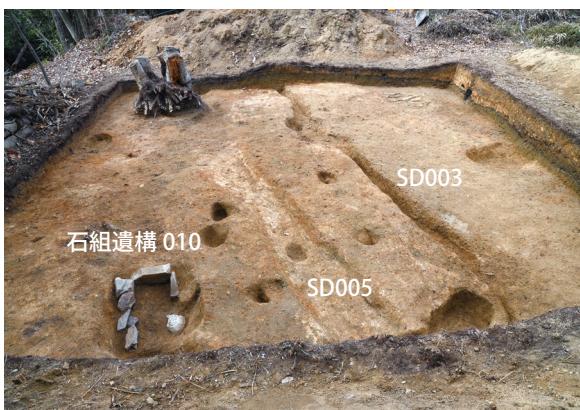


写真10 C区全景（東から）

SD005はD区のSD015同様に曲輪内の排水目的の溝であると考えられます。

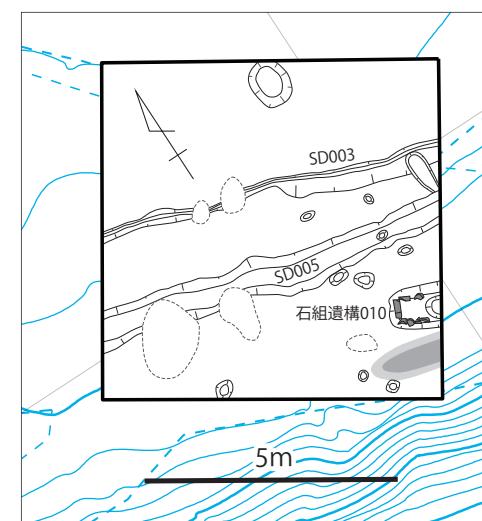


図9 C区平面略図



写真11 石組遺構010（東から）

石材は熱を受けて赤く変色し、下層には炭が厚く堆積していました。ここから出土した土師器皿は少し新しい様相を呈しており、城廃絶後の遺構である可能性も考えられます。



写真12 祥符通寶

1009年初鑄の宋銭。盛土層から出土。地鎮に用いられた可能性もあります。



写真13 盛土による整地痕跡（南東から）

主郭と考えられる曲輪Iの南側では最大1.8mの盛土による大規模な土木工事が行われており、盛土層からは銅錢が出土しました（写真12）。

D区では南北方向の土墨 040 を検出、これより西側は「切岸」となり、急峻な斜面になっています。調査区南側では土墨部分を横断する溝 SD025 を検出、その南側では礎石列も検出しています。SD025 からは土管が出土しており、この溝は土墨の下に造られた排水用の暗渠であったと考えられます。

D
X

このほか、径 3 cm 前後の円礫がまとまって出土した集石遺構 020、石材を方形に並べた石組遺構 030 などが見つかっています。

土墨の内側の溝 SD015 などからは完形の土師器皿や銅製品、鉄製品のほか、木炭などがまとまって出土しています。

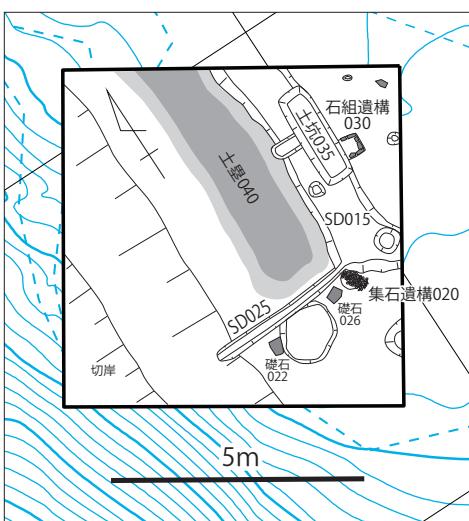


図 10 D 区平面略図



写真 14 D 区南東の遺構（東から）

溝 (SD025) は土墨の内側に溜まった水を主郭である曲輪 I から排水するための溝であったと考えられます。溝の幅は出土した土管の復元直径とぴったり一致しています。最終的に北田原城が徹底的に破却されていることを示唆しています。



写真 15 土管 (SD025 出土)

同じような土管を用いた暗渠は古市城跡（奈良市）でも見つかっています（奈良市 1981『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和 55 年度』）。



写真 16 石組遺構 030（西から）

コの字状に石を並べ、その内側に小さめの石を詰め込んでいました。大坂城跡でも似通った遺構が検出されており、排水構であった可能性が考えられます。



写真 17 溝 SD015 遺物出土状況（東から）

完全な形の土師器皿のほか、木炭・銅製品・鉄製品が連なって出土しました。一度に捨てたものと考えられます。



写真 18 漆塗り銅製品 (SD015 出土)

断面長方形の中空の青銅製品に布貼りをし、黒漆を塗って丁寧に仕上げています。現段階では用途を明らかにできません。

2. 北田原城と坂上氏

北田原城に関する史料は多くはありません。これは発掘調査で得られた同城の年代幅が短いこととも呼応しているように思えます。

北田原城と同時代の一次史料としては『多聞院日記』の記述があるのみです。これによると、永禄 10 (1567) 年 9 月 22 日、「田原之坂上」氏が松永久秀に再び寝返り、松永久秀は多聞城から 500 人ほどの援軍を飯盛城に入城させています。この時期、飯盛城をめぐっては三好三人衆と松永久秀の間で目まぐるしい交代劇があり、同年 8 月 25 日に飯盛城の松山守兵衛 (守勝) が松永方に寝返っていることが記されています。『多聞院日記』には坂上氏に関するこれ以外の記述はありませんが、「又裏帰了」という記述から、両者の攻防の狭間で揺れ動く坂上氏の姿が浮かびあがります。

ただ、『多聞院日記』には「田原之坂上」と記されるのみで城名は記されていません。しかし、享保 21 (1736) 年の『大和志』には「北田原村ノ城ハ坂ノ上丹後守」と記され、安永 3 (1774) 年の「十一ヶ村村鑑」にも北田原村に「坂上丹後守殿城跡」があったことが記されています。北田原村の城と坂上氏を結びつける伝承が残っていたようです。

また、一次史料ではない家系図や縁起などに関しては、その取扱いについては慎重を期す必要がありますが、「鷹山氏系図写」や「鷹山家略譜」、「大和国添下郡岩屋山岩藏寺記」には坂上氏に関してより詳しい記述がみられます。これらの史料については信じるとすればという前提ではありますが、総合すると以下のようになります。

河内との国境にあった「田原ノ城主」であった坂上尊忠 (後に「清兵衛尉又丹波守」) は鷹山弘頼 (1517 ~ 1553 年) の娘を妻とします。坂上尊忠は父である肥後守の代から田原の城主でした。永禄 10 (1567) 年 9 月 22 日、坂上氏は再び三好方から松永方へ寝返ります。天正 7 (1579) 年には北田原城の南方にあった岩藏寺の本堂外陣を再建します。天正 13 (1585) 年には城を離れ牢人となります。慶長 19 (1614) 年の大坂夏の陣では豊臣方として道明寺口の戦いで秀頼の乳兄弟である結城権佐の先陣となります。翌元和元 (1615) 年、5 月 5 日、鉄炮で胴を撃ち抜かれ、大坂城に戻るが、翌朝、命を落としたとされます。法名は「月山宗清」。

今回の調査で出土した遺物からみた北田原城の年代観が 16 世紀前半から中頃で比較的短いこと、さらには 16 世紀末葉までは下らないことなどを考えると、文献史料による坂上氏の動向とは多くの点で整合性があるといえそうです。

<p>①『多聞院日記』永禄十年 (一五六七年)</p> <p>田原之坂上松少へ又裏帰了云々、即生馬谷今朝少々焼煙見了、 多聞山より飯盛城へ人数五百計今曉被入了云々</p> <p>『多聞院日記』永禄十年九月二十二日条 (英俊著、辻善之助編) 『多聞院日記』第2巻 三教書院 一九三五年、三四頁</p>
<p>②『大和志』享保二十一年 (一七三六年)</p> <p>山田城在二城村一在原氏所レ拠 又有二郡境二北田原村城ハ 坂ノ上丹後守者所レ拠 (後略)</p> <p>『大和志』(『五畿内志』)並河永享保二十一年 (一七三六年) (『五畿内志』中巻『日本古典全集』第三期 日本古典全集刊行会、 一九三〇年、二五八頁)</p>